海外の伝統的住居を扱った市販絵本を活用した家庭科での住教育の試み

Housing Education in Home Economics Using Published Picture Books on Traditional Dwellings

住居学科　Dept. of Housing and Architecture
薬袋奈美子　Namiko Minai
吉川　知子　Tomoko Yoshikawa*
乾　陽子　Yoko Inui**

抄　　録　海外の住まいについての絵本を用いた，住まいの教育方法の提案を行い，家庭科の導入として利用することについての，教育効果を確かめる研究である。グループワークでのワークシート及び各グループの発表を踏まえて個別に記入された振り返りシートをもとに，教育効果についての分析を行った。その結果，資料に直接説明の無い生活空間や，使われている建材が何故使われているのかということについて，絵や写真から読み取ることのできる内容を考え，推測し，想像をしており，情報を総合的に理解し考える力を活用する課題となっていることがわかった。

キーワード：住教育，空間認識，シティズンシップ力，スキル，なりきり，考える力

Abstract　This paper investigates the effectiveness of housing education using traditional foreign dwellings. This education program is practiced as the introduction to a housing study unit in a Home Economics course. The review is based on a worksheet outlining group activities and a personal reflection sheet filled in by pupils. The analysis demonstrates that pupils were easily able to understand information from provided materials appropriately, and to integrate information in order to imagine life in foreign countries.

Keywords : housing education, space perception, citizenship, skill, pretending activity, thinking skill

1. はじめに

1.1　研究の背景・目的

“想定外の津波だったので避難しきれなかった”といった発言が，2011 年 3 月 11 日以降，何度も繰り返されてきた。しかし本当に想定外であったのかといえば，そうではない。過去には類似した規模の津波は発生したことがあったようだし，多くの人が高い場所に避難して助かっている。土木工事による防災工事は万能ではない。立派な防潮堤があることで避難への必要性の危機感が薄れた人もいた。このようなことは，これまでの災害でも多々起きている。その背景には，土木工事を推進する際の安全性の伝え方についての問題があり，またその情報を適切に受け取らなかった，言い換えると行政の出す表面的な宣伝を鵜呑みにしてしまう市民がいたという状況がある。

より安全に快適に暮らすためには，住民が住まいやその住環境についての理解を深め，自らの安全を確保することができる環境を整える必要がある。そのためには，今以上に住教育を充実させることが必須だ。そして住教育は単なる住まいについての知識を伝えることではない。多くの知識を持つことは不可能であるし，変化もする。基礎的な知識は勿論大

* 日本女子大学通信教育課程生活芸術科　卒業生　　** 福井県土木部

切であるが，それと同時に考えたり情報を集めたり，時には話し合ったりする力も同時につけることが求められる。こういった力をシティズンシップ力と呼ぶ。住教育にかかわるシティズンシップ力を整理したものを表 1 に示す。

表 2 に小学校の学習指導要領の中に書かれた，住環境に関連する学びの項目を整理する。これを見てもわかるように，住生活に直結する知識を幅広く学

表 1　住教育で身に付けたいシティズンシップ力

シティズンシップ力	具体的に何ができるようになるか
A　情報を収集・分析して，自分の意見を持つ力	調査する力 様々なツールを使いこなす力 諸々の事象を観察する力 物事を理解するために質問をする力 自律的に行動し，考える力
B　様々な立場の視点からものを見ることのできる力	背景を理解する力 想像する力 批評する力 様々なことに好奇心を持つ力 権力者や既得権者の視点を理解する力 メディアの視点を理解する力
C　周りの人々と共に問題に取り組む力	自分とは異質な集団で交流する力 対話・議論する力 （自らの意見を主張・他者の意見を聞く） 議員等に働きかける力 責任を持って参加し，周囲と協力し合う力

表 2　新学習指導要領での住教育内容（小学校）

分野	小学校　学習指導要領に見られる関連した内容
計画	整理・整頓や清掃，季節に合わせた快適な住まい方（家庭科）
構造・材料	立体図形についての理解（算数） 基本的な平面図形の面積の計算（算数） 材料や場所などの特徴をもとに工夫した楽しい造形活動（図画工作）
温熱音・環境	森林資源の働きおよび自然災害の防止（社会） 身近な自然とかかわり，自然を大切にする（生活） 季節や地域行事，四季の生活の様子の変化（生活） 自分の生活と身近な環境とのかかわりに気づき，物の使い方などの工夫（家庭） 厚さ，寒さ，通風，換気および採光について理解する。（家庭科）
意匠・景観	身近な地域や市（区町村）の特色ある地形，土地利用などの調査（社会） 場所の特徴を基に発想し，想像力を働かせて，構成・制作（図画工作） 地域の人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働き（社会）
経済	地方公共団体や国の政治（社会） 日本の産業の様子，産業と国民生活との関連を理解する（社会）
都市インフラ	身近な地域や市（区町村）の交通の様子（社会） 生産地と消費地を結ぶ運輸や工業生産を支える貿易や運輸など（社会） 地域の人々の生活に係る，水，電気，ガスの確保や廃棄物の処理についての調査（社会） 地域の公共物や公共施設の存在と支える人の理解（生活）
福祉・健康	公害。国民の生活や生活環境を守ること（社会） 身近な幼児や高齢者，障害のある児童生徒など多様な人々（生活） 健康のために，明るさや換気を整えること（保健体育）
防災	地域社会における災害及び事故から，人々の安全を守るための基幹の働きとそこに従事している人々や地域の工夫を理解（社会） 学校の施設や通学路の様子などに関心を持ち，安心して生活できるように（生活）
社会参加	自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝えあう活動を通して交流（生活） 自分たちの生活は地域での人々や様々な場所とかかわっていることを理解（社会） 身近な集団に参加し，自分の役割を自覚し，協力して主体的に責任を果たす（道徳）

んでいるはずである。しかしそれを自らの住まい選びや，住生活の工夫のために活かされているかというと，必ずしもそうではない。例えば西向きの部屋が季節ごとにどのように太陽があたり，夕方以降の室内温度がどのように変化する可能性があるのかは，太陽高度と季節の関係や，物の温度の変化についての理科の基礎的な知識があれば容易に理解できるはずであるが，それを自らの住まい選びの際に意識して皆が選んでいるかというと，そうではないようだ。応用する力を培う必要がある。

住教育の可能性は，学校教育の中でも様々な科目にわたって追求しうるものである。その中でも，家庭科での住居の学習の導入での試みを扱う。家庭科での住居学習は，様々な試みが提案されているにも関わらず，現場の教員からは，食物や被服の分野に比すると，生徒の興味を惹かせることが困難であるという指摘や，教材が少なく指導に困ることが多い，住居に充てる授業時間が少ない，場合によってはほとんど行われていない[5]。これは，住居領域の授業において家庭科教師が直面している，住居にかかわる専門的内容の勉強不足，実習的な作業のやりにくさ，特に家庭科が家庭生活とリンクさせるべき科目であるにもかかわらずプライバシー侵害への不安が大きいテーマであること，また適切な教材教具の不足や授業研究の不足といったバリアが，住居領域を敬遠させているためと思われる。

本稿では，家庭科の目標である自立した生活者を育成するという目的，更に住まい・まちを形成する一員となるための知識やスキルを，楽しく身に着ける機会として，興味を持ちちやすい教材として提案された住教育プログラムの効果を確かめることを目的とする。これは，著者らによる“国際理解教育＆住教育への手引き”[1]に掲載されたものに基づく。想像力，説明する力を，児童の作成したワークシートや振り返りシートから確かめる。更に，複数の国の住宅を扱っているが，どの国が教材としてより適しているのかも検証する。提案したプログラムの妥当性の確認と改善に向けてのヒントを得る研究である。

なお本研究は，筆者らによるImpact of housing education using traditional dwelling —Education of knowledge and skills in primary school—[3]の続報である。この第一報では，情報を資料の文や絵のどの点から読み取ることができたのか，また記述方法の妥当性について検証を行った。

1.2　調査の方法

本稿では，まず小学校５年生の家庭科・住居領域の授業研究として，導入にあたる部分で児童の興味を惹かせ，かつスキルを高める方法の提案を行う。その上で，児童の学習成果として作成されたワークシートに記載された内容について分析を行い，住まいについての関心を持ち，またスキルを活用することができたのかを確かめる。

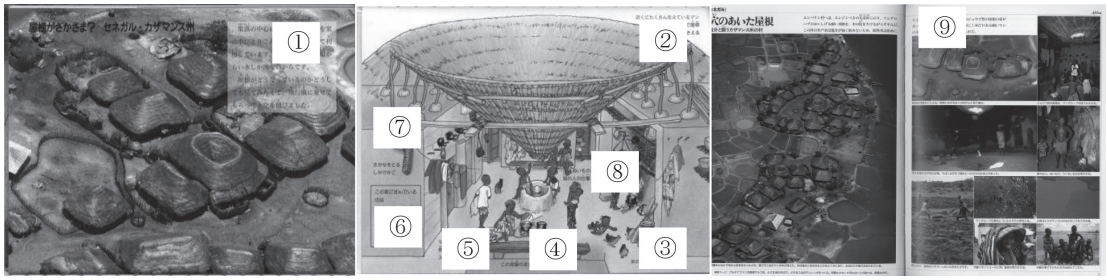
具体的には，教材として海外の住まいを紹介した絵本を用い，世界の多様な住まいを知ることで，関心・認識・意欲を高めることを目標（図１）とした授業方法の効果と検証を行う。これは，平成21年から22年にかけて，福井県内の４小学校で，合計13クラス，248人に対して行った授業の成果である。授業者は福井県の建築・土木職の職員が出前授業を行う形式で実施された。授業実施にあたっては，担当教員との十分な打ち合わせを行い，その後の学校での授業につなげていただけるよう配慮した。

2.　授業の概要

授業では，小松義夫による“世界あちこちゆかいな家めぐり”[7]及び“地球生活記”[8]のうち，セネガル，チュニジア，モンゴル，インドネシア，及び中国の伝統的な住宅のうち，図２～３に示すものを用いる。セネガルのカザマンズ州にあるじょうご型の屋根を持つ家，チュニジアの地下住居，モンゴルの移動式テント住居パオ，インドネシアのスンバ島の屋根が高い住居，そして中国の客家の土楼である。

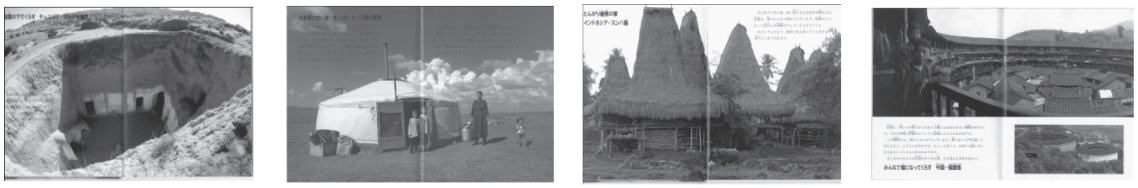
①**関　心**	子どもたちの想像力・イメージ形成力・感受性を育み，人（家族）や生活を長期にわたって内包する「住まい」への関心を高めること
②**認　識**	様々な気候・風土に合った多様な「住まい」「住まい方」の工夫があることに気づくこと
③**意　欲**	快適な「住まい」「住まい方」について考え，実践していこうとする意欲を高めること

図１　授業目標



①集落の中心にある家は，雨水を家の中にとりこんで，飲み水として利用しています。井戸をほっても潮からい水しか出ないからです。屋根がどうなっているのかどうしても見てみたくて，飛行機に乗せてもらって上空を飛びました。②近くにたくさん生えているマングローブの幹で屋根をあさえる　③コメの脱穀に使ううすときね　④この部屋のまわりに4つ部屋がある。　⑤マングローブの根につくカキをスープにする。⑥この家にすんでいるのは，おじいさん，おばあさん，お父さん，3人の子どもとそのお母さん，4人の子どもとそのお母さん　⑦さかなをとる　しかけかご　⑧ぬいものは男の人の仕事　⑨穴のあいた屋根　塩分と闘うカザマンス州の村：エンバリン村へは，エンジンつきの丸木舟にのり，マングローブのおいしげる細い水路を，木の枝をさけながらすすんだ。この村の井戸水は塩分が濃く飲めないため，飲料水は雨水にたよっている。雨水をためるためのジョウゴ型の屋根の家があった。屋根を上から撮ろうと，村に一本だけある細いヤシの木に登ろうとして，村人にとめられた。

図 2　配布した資料の様子（セネガル）



チュニジアの地下住居　　モンゴルのパオ　　インドネシアの木造住宅　　中国の客家の土楼

図 3　配布した国の住宅の様子

表 3　授業の概要と利用する主なスキル

	授業の内容	知識	スキル		
			A 情報取得・分析	B 多様な視点	C 協調的課題解決
1	対象住宅の場所や気候について説明	○			
2	グループ（4～5名）で国別の**絵本**を参考にして，**ワークシート**の設問に回答しながら，ある国の住まいの特徴を探る	○	・空間等にかんする情報を読み取る ・事実と想像を使い分ける	・他国の家での生活を想像する	・友達と協力して，他国の生活についてワークシートに記入
3	調べたこと，その住まいの良さを，その国の人に**なりきって発表**	○		・他国の家の子どもになったつもりで話す	・クラスの前で発表をする。
4	児童同士で質疑応答・指導員からの補足説明	○			・自分の思う疑問を投げかける。 ・他者の意見を聞く
5	ふりかえりシート記入	○			・得られた情報をもとに自分の考えを整理する。

表 4　児童への設問

なりきりシート（グループワークシート）	ふりかえりシート
どこの国，まち，村の人？ どんな形？広い？小さい？四角い？丸い？ どんな場所に建っているの？ 屋根，かべ，床の材料はどんなもの？ どうしてその材料を使っているの？ ふだん家の中で靴をはく？ 食事はどこでするの？ 水はどこから持ってくるの？ トイレはどこかな？ 寝る場所はどこ？ 体が汚れたらどうやってきれいにするの？ 窓はある？ 鍵はある？	きみの家と一番違うとも追ったところはどんなところ？ 　どこの国？ 　どんなところが？ 　どうして？ すごい！かしこい！と思ったところは？ 日本の家や自分の家のいいところ，好きなところを教えて（どうしていいと思うのか，好きなのかも書いてね）

授業の構成は，表 3 に示すように行う。最初は対象とする住宅の場所や気候について，世界地図を見ながら簡単に紹介をする。その後グループに分かれて，各々一つの国を担当して，ワークシート（表 4 参照）に従って，情報を整理する。中には，提供された資料からでは読み取ることのできない質問もあるが，それは敢えて想像することにしている。この学習は，住宅の特徴を，周辺環境を含めた形態，衛生設備，及び生活方法の幾つかの観点から読み取る練習をするという住まいについての学習がめあての一つである。またグループでこれらの作業をやることにより，協調性を培い，またわかることと想像できることとをはっきり分けて記載させることにより，適切に情報を整理する訓練も兼ねる。配布した資料の国は，中国のみ 10 グループであったが，残りの 4 か国は 13 グループで取り組まれた。

次に調べた内容を，その国の子どもになったつもりで，クラス全員に発表をする。ここでは“なりきり”が重要で，他者の立場に立って住まいや生活に思いを馳せることにより，様々な立場から物事を見るトレーニングともなる。また聞いている児童にとっては，話を聞き取る練習と同時に様々な住まいについての比較を行う機会となる。

最後に振り返りシートを記入する。このプロセスで児童は自分でじっくり考える時間を持つ。わかったことを表現する時間でもある。スキルとして，自らの考えを整理する機会となる。

各ステップにおいてどのような学びがあるのかを整理したのが表右側部分である。どの段階でも新たな知識を得る可能性があると同時に，振り返りシートを行う際には，その授業時間内に得られた知識を再度整理し，また学びの内容を自分の言葉で表現をする時間でもある。

3. グループ活動での考える力の分析

3.1　想像する力について

表 5 は，グループ活動で利用したワークシートの中で，家の形についての説明として“想像できるこ

表 5　家の形の説明に対して“想像できること”として記述された内容

国	記述内容
チュニジア	せまそう
	砂が落ちそう
	へやは，はんけいのつつみたい
	長丸
	トンネル
	土はきっとかたい
モンゴル	丸い形
	せまくて屋根が△
	らんらんルームの 3/4 くらい。大きさ
インドネシア	広そう
	すぐくずれそう 火事になったら大変
	高いけど中はせまい
	やねには，かみさまがすんでいます
	日本の 2 階建てよりたかい
セネガル	不便そう
	人がいっぱい入りそう
中国	たくさん住める
	部屋が多くてまちがえやすい
	真ん中にあるのは先祖をまつるお堂
	たくさんの人が住んでいると思う

＊類似した内容のものは省略してある。

と”の欄に記述されたものである。家の形については写真や絵，また文章を読むことで，書くことができるものである。それでも敢えて形について想像できることとして数多くのことが記述された。一つ一つ子供らしいユニークな表現であるが，これを更に内容別に整理をしたものが表 6 である。形の説明が 7 件と最も多いが，空間に対するイメージや，素材の材質感等についての特徴についての言及があり，単なる形としてだけでなく，「土はきっとかたい」等といった触った印象についても想像して書いている。住まいの理解の第一歩は，自分がそこに身を置いていかに想像できるかであり，その試みを意識的に行っている児童が見られたことは興味深い。

更に国別に整理をすると，チュニジアの住宅についての記述が最も多い。日本の住宅の特徴と，建設材料からして大きく異なりインパクトの強い国が，“この家に入ったらどんな感じになるだろうか”という想像力をかきたてるのかしれない。

3.2　絵に描かれていない空間についての想像

生活スタイルを示すような場の一つとしてトイレの存在について尋ねた。いずれの国についても絵本の中で特段の記載はない。そのため想像をしなくてはならない。児童の記入結果を表 7 に示す。絵本に上手く表現されてある家の全体像（図 2 参照）を見て，そこに描かれていないことについて“無い”旨の回答をしたグループが多い。全体で 50 グループによる記述があったうち，想像欄に記述したのは 16 グループであり 3 分の 1 程度である。残りのグループは，はっきりわからないにもかかわらず“わかったこと”欄に記入している。全体として，見えないのだからないのだろうという想像した事柄を，“わかったこと”として認識してしまう傾向がある。家の中がよく想像できていると考えることもできるが，確かでないことでも，確かなこととして表現する状況にあることが確認できる。

こういったことは一回でできるようになることではないが，わかることと想像できることの区別をするトレーニングは今後とも必要なことであると言えよう。

3.3　建物の材料の使われる背景について

建物の素材について，何でつくられているのかを，グループワークの質問項目に入れてある。建物の材料については，多少説明文でも触れられているが，絵を見て回答することとなる。この点については，表現方法についてはいくつか異なるものが見られるものの，全てのグループが回答することができた。

表 6　家の形について“想像できること”として記載されたもの記述内容別分類

	チュニジア	モンゴル	インドネシア	セネガル	中国	合計
空間に対するイメージ	1	1	2	2		6
形の説明	3	2	1		1	7
素材の特徴	2		1			3
自分の知っている空間との比較	1	1				2
利用状況					2	2
自分が利用する際の感想の想像					1	1
合計	7	4	4	2	4	21

表 7　トイレの存在についての回答状況

回答内容		チュニジア	モンゴル	インドネシア	セネガル	中国
わかったこと欄に記入	ない	7	3	2	3	
	外			6	2	8
	家の中				1	1
	その他		1			
想像欄に記入		3	3	5	3	2

次にそれらの建材が何故使われたのかという点について尋ねた。“わかったこと”に何らかの記載をしたグループは13グループ中，チュニジアが12，モンゴルが11，インドネシアが7，セネガルが8，中国が9グループ中6グループであり，多くのグループが何らかの記載をした。

記載された内容を，国ごとに整理して示したのが表8である。このことについては，テキスト本文に関連した説明があるものがあり，例えば，温度が20℃から28℃に保たれるというのは，資料に掲載されていた内容である。その建材のもたらす性能についての説明がされていると言え，それを読み取った児童も多い。しかし，建材は見ればわかっても，何故それを使うのかは，はっきり説明されていない。絵から読み取ることのできることとしては，周辺の状況で，例えば木が沢山あれば，それを使うことができるだろうし，何もなければ，穴を掘る等して，空間を確保せざるを得ない。そういった内容を記載できたことは，材料の存在と周囲とをうまく結び付けて絵を見取ることのできる力があったグループとい言えよう。

また，“想像できること”への記載を行ったグルー

表8　住宅の建材についてそれを使う理由の記述例（抜粋）

国	“わかったこと”欄への記述内容	“想像できること”欄への記述内容
チュニジア	**砂漠だから土しかない。** 穴のまわりや入口を石灰で白くぬると「人のすむところ」という気分がもりあがるから 地下は温度が一定に保たれている 地面の下だと一年中20°C～28°Cですごしやすいから 寒さや厚さをふせぐため 地面の下だから *土の中にすんでいるから* *水はけよいから*	**木とかがなさそう** **そこには土などしかないと思う** 湿度調接ができるから 夏は50ど近く冬は0ど以下 暑くなさそう
モンゴル	フェルトの天幕は断熱性にすぐれているから冬でもあたたかいから **移動するときにばらすから　ばらしやすいように**	かるくて運びやすいからだと思う いどうするとき　ばらして馬で運べるから 組み立てやすいから その材料しかない ふわふわ
インドネシア	夏のように熱いから風通しをよくするため **木や竹はたくさんあるから** **屋根を高くするため** *お金がなく，ざいりょうがないから*	通気せいがよさそう **草と竹しかないから** **竹がたくさんありそう** 竹，草がじょうぶ
セネガル	じょうぶだから **近くにたくさんはえているから** **これしかない** 屋根をささえるため 屋根　マングループの根元に床？　壁？	**いっぱいマングローブの木がはえているから** **近くにあるから** **自然がいっぱいだから** 地震に強そうだから 家をたてるから
中国	トラや外敵から守るため	土と石をつかうとじょうぶになると思うから

＊太字は周辺環境に関連した記述内容

プも全体で，32 グループと，多くのグループが想像できることも記載した。これらを見ると，多くの児童が周囲の環境を意識した想像をしていることがわかる。本来は，本文中に明記されていないことなので，“わかったこと”ではなく“想像できること”への記載が妥当であり，多くのグループがそれに気が付いて書き分けをしている。

更にこの欄には，材料の持つ特質や性能を意識した理由づけを書くグループも目立つ。一つの質問に対して，わかったことと想像できることの両方を書き，特に異なる説明書きをできたグループも多い。一つの答えだけでなく，複数の答えの可能性を見出し，記載することができた。

このような説明する力，そして要因を考える力は，情報を読み取るスキルとして大切な力である。モンゴルと中国の家については，このような想像力を働かせにくい素材であったようだが，チュニジア，インドネシアについては，特に周辺環境との関連を児童たち自身が考えやすい資料であると言えよう。

4. 個人の振り返り作業における空間の読み取り

4.1　児童の着目点

「ワークシート」の設問別に「ふりかえりシート」のコメントを集計し，“日本と違うと思ったところ”“すごい　かしこいと思ったところ”，そして“日本の良さをみなおした点”の 3 点について，ワークシートのどのような内容の発表に基づくものなのかを整理した。その結果を図 4 に示す。ワークシートの設問を 3 つ（建物の形状・衛生設備・生活様式）に区分すると，建物の形状（形・場所・材料・窓）に関するコメントが多い。「日本と違うと思ったところ」については，多数の児童が，形や材料の違いから多様性を捉えている。各土地に合った材料を使っていることから，その多様性の背景を認識できた記述も見受けられた。「日本のよいところ」については，窓の存在とその役割について記述した児童が多い。海外の伝統的な家では，窓のない家もあることを知り，当たり前と考えていた窓の存在と光・風・景色等を得られる貴重さを再認識している。衛生設備（水・トイレ・お風呂）に関しても同様に，改めて自分の生活を見つめ直すことにつながっている。

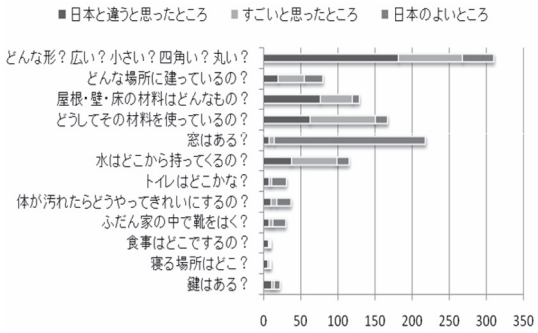


図 4　「ワークシート」設問別「ふりかえりシート」のコメント数比較

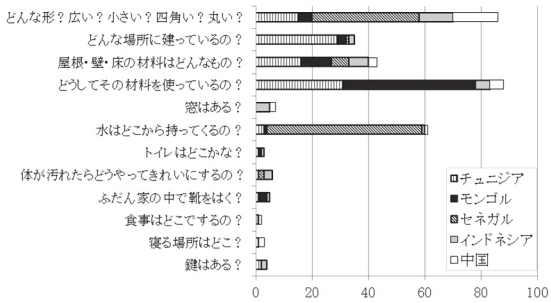


図 5　ふりかえりシートの“すごい・かしこいと思ったこと”についてのワークシートの質問別，国別回答者数

4.2　印象深い空間についての捉え方

図 5 は，“すごいと思ったこと”について，ワークシートのどの設問に該当するものなのかを，国別に整理したものである。形については，セネガルが最も印象的であるようだが，全ての国について複数の児童にとって印象的であったと言える。殊に，どうしてその材料を使ったのかという理由について，すごい，賢いと感じていることがわかる。単に見える形の違いも印象的であるが，それ以上に，何故そのようなことになったのかという理由づけに対して，多くの児童が素晴らしいと回答している。各地域の伝統的な住まいに見る人間の叡智を知ることで，ただの驚きではない学びに繋がり，かつ印象に残っていることがわかる。

また，水をどこから持ってくるのかということについて，セネガルの屋根の水を貯めるようにできた家の構造についてすごいと感じている。水は水道水が当たり前に出てくる国の児童にとって，井戸を使

表 9 「すごい，かしこいと思ったところ」国ごとの最も多かったコメント

国名	最も多かったコメント	人数
チュニジア	快適な室温を一年中保てるため，地下に住む	31
モンゴル	家を自分たちで組み立てて，家畜と共に移動する	52
セネガル	雨水をためて飲み水にしている	55
インドネシア	高い屋根には神様が住み，床下には家畜がいる	45
中国	300 人が一緒に住んで，助け合っている	18

うということは比較的身近な道具として触れる機会はあるものの，雨水をためることというのは，大きな発想の転換につながるものだったのだろう。

これらの海外の住まいを見ることで，自分の住まいを見つめ直す作業を同時にできている様子が伺われ，住教育の導入として高い効果が得られたといえる。

「すごい！ と思ったところ」については，設問以外の「その他」で集計したものが多かった。各国で最も多かったコメントを表 9 に示す。いずれも，様々な気候・風土に合った多様な「住まい」「住まい方」の工夫があること，環境に応じた文化と「住まい」の関係があることを認識し，すごい！ と敬う気持ちを持つことにもつながった。これらは，住まいに対する理解を深めたことを示すものであり，また同時に住まいを単に形の面白さ等で興味を持つわけではなく，形とその使い方或は暮らし方とをセットで理解し，“すごい”と感じていることがわかる。住まいは，空間の面白さだけではなく，各々の暮らしのためにどのような形であることが望ましいのかということは，各自が住まいを作ったり選んだりする際にもとても大切な視点である。先祖からの住まいをどう受け継ぎ，どう変えていきたいのかを考えるためにも，良い捉え方ができている。

5. 取り上げる国の妥当性について

本研究では，チュニジア，モンゴル，セネガル，インドネシア，及び中国の特徴的な住宅を，絵本の中から取り上げて分析を行った。これらの住宅について，今回の授業方法で扱うにあたって，児童が十分に住まいのことを考える教材として活用されたのかを確かめる。

チュニジアについては，地下住居ということもあり，多くの児童にとって印象的で説明したくなるようなことが多いようだ。文献 3 に挙げた論文の中で

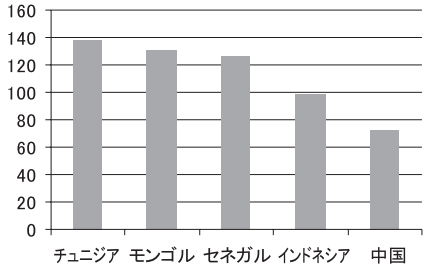


図 6 すごい・賢いと思ったことへの国別記述件数

もワークシートへの記述件数が最も多く，また日本との空間の差異についての説明をしやすい国であることが確認できた。この住宅は，断熱性についての説明が，絵本の本文にも記載されている。地下であることにより調温機能が高い住まいがあるということに気が付く点で，教材としての有効性が高い国であろう。

モンゴルのパオについては，図 6 でも示される通り，“すごいと思う”住まいの一つであり，他の国の住まいの素晴らしさを認識するための教材としては良い。しかし，何故そのような材料を使った家にするのかといった説明を考えたりする発展的な思考に導く教材としては，何故移動しながら生活するのかといった更なる補足が説明であり，今回とりあげた教材を使った気軽に取り上げて，考える深める教材としては難易度の高いものと言える。

セネガルのじょうご型住宅は，“すごいと思ったこと”として多くの児童が挙げており，また“どのような点をすごいと思うか”ということについても，住宅の形以上に生活の工夫といった点において，日本の住宅と異なり非常に印象的であったようだ。家庭科の導入として自分の家を見つめ直すための見方を拡げるポイントとしての水道を中心としたインフラ面で特徴的であることは，教材としては重

要であろう。

インドネシアの住宅については，日本と形が最も類似しているにもかかわらず，神様を大切にしている点などが非常に印象的なようで，殊にワークシートにおいて理由などを想像して書きやすい教材であるようだ。それは，文献３で整理をしたワークシートへの記述件数の多さや，本稿表７でのトイレの場所についての記述状況や，表８の建材の利用理由についての想像された内容において確かめられる。また家庭科の学習内容として期待される風通しの点についての記述もあり，学習効果の高い教材であると言えよう。

中国の土楼については，多くの人が一緒に住むというライフスタイルに対する興味深さを感じる児童が多く，そのことが表９でもわかる。しかし，日本の現在の住宅と類似した点が多いことや，暮らし方，形としては興味深いもののそもそもこれらの住宅は，周辺の自然環境によるのではなく社会的背景によって創り上げられた形であるという点から，今回の授業プログラムの中で積極的な記述に繋がる国ではなかった。

以上，本教育プログラムの目的である，住空間に興味を持ち，またスキルを培うという目的を鑑みて振り返ると以上のように，特にチュニジア，セネガル，インドネシアの住宅において，教育効果が高いと言えよう。当該の本には他にも幾つかの国の住宅が掲載されているので，今後はこれらの国での試みも検討しつつ教育プログラムを改善することができよう。またモンゴルのパオや中国の土楼も，児童への投げかけ方を変えることで教育効果の高い見方ができるかもしれない。それらの可能性への検討も行いたい。

6. まとめ・今後の課題

外国の住まいを紹介した絵本を用いて，なりきり作業も含めたグループワークや振り返りシートを通した個人での住宅について感じたことを書く作業等を通して，普段の自分の家とは異なる家に関心を持ち，改めて日本の住まいの良さを振り返るきっかけを掴む機会を持つ授業であったことが確かめられた。

本研究では，特にスキルとしての，読み取ることのできた事実と想像して考えたことの使い分けをうまくしたのか，また，トイレの場所を考えてみる等描かれていない部分についての想像をめぐらし，建材の調達状況について考えてみるという作業を行うことができていた。絵や文字情報から，全く異なる場での生活の様子を想像し，振り返りシートに記入をすることで，住教育に必要なスキルを活用していることが確かめられた。スキルの向上が必要であることも，明らかになり，スキル向上のための工夫が一層必要である。

取り上げる国については，チュニジア，セネガル，インドネシアといった国のほうが，モンゴルのパオや中国の土楼よりも活発に意見が出されることが確かめられた。取り上げる国を絞る場合にはこれらの国を優先的に使うことで授業効果が高いと言えよう。

家庭科の学習指導要領では，①住まいに関心を持つことや，②快適に住まうために明るさ，風通し，暖かさ（涼しさ）といった点に気が付く教育をすることが求められている。本教育プログラムにおいても，①の住まいへの関心は，どの児童も他の国の住宅の“すごい”と思える点を見つけ，かつ“日本の住まいの良い点”を記述することができていたということからも，何らかの形での関心を持って住まいを見る時間を持つことができたと言えよう。また，快適に住まうための明るさ，風通し，暖かさといった点について，窓の有無をグループワークで確認をしたり，どのような建材を使い何故それを使うのかを考えたりする過程で，風通しや，断熱性といったことについての言及が複数の国で見られた。家庭科の住まい学習の導入として利用にも効果的であろう。

家庭科の住分野の授業が，このプログラムだけで充実するというわけではない。他の教科との連携も含め，今後も様々な授業提案を行い，検証を進めたい。

付記

授業開発を行った住教育研究会の皆様，授業への協力をして下さった福井県の旭，高椋，日出，清水南小学校の皆様に感謝いたします。

主要参考文献

1）薬袋奈美子，加藤優子：国際理解教育＆住教育への手引き，住教育研究会（1996）
2）加藤優子，水上聡子，薬袋奈美子：絵本を活用

した住教育と国際理解教育の実践報告―小学校における実践授業に関する研究,「住まい・まち学習」実践報告・論文集, **8**, 19-24（2007）
3）薬袋奈美子, 加藤優子：国際理解教育＆住教育への手引き, 住教育研究会（1996）
4）Minai N.: Impact of housing education using traditional dwellings—Education of knowledge and skills in primary school—, Journal of 2011 International symposium on City Planning, 355-364 (2011)
5）荒井紀子：生活主体の形成と家庭科教育, ドメス出版（2008）
6）正岡さち, 高嶋智恵：小学生の住意識と住教育に対する意識, 島根大学教育学部紀要（教育科学）, **44**, 41-48（2010）
7）小松義夫（文・写真）, 西山　晶（絵）：世界あちこちゆかいな家めぐり, 福音館（1997）
8）小松義夫：地球生活記―世界ぐるりと家めぐり, 福音館書店（1999）